
九十九奇譚

コウヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

九十九奇譚

【Nコード】

N0263U

【作者名】

コウヤ

【あらすじ】

見える少女と見えない少年の妖異幻怪な物語。

羨望の麓

八重市^{やえ}緋知^{ひちり}町。

水が清いことで有名な伊陽^{いよう}連山の一つである緋知山の麓に沿っている町だ。

山の東端は緩やかなコの字型を描いており、その両端にはそれぞれ深鎚^{みづつみ}寺と逸神^{いつみ}神社という寺院仏閣がある。

双方は昔から地元に親しみ、時には暗がりに住む者達から町を護ってきた歴史を持っていた。

だがそんな徳高い寺の、住職の息子として生まれた水科^{みずしな}晃郎^{こうろう}が怪異を目撃したのは、十七年生きて来た中でたったの一度だった。

小学校低学年くの幼い時分だったので所々記憶は曖昧にぼやけているが、夏だったように晃郎には思える。蒸し暑い日だった。

黒の強い灰色の雲が分厚く天を覆っている。

今にも降り出しそうな低くなった空の下で、晃郎は仲の良い女の子と田圃の畔を足早に歩いていた。

視線は下を向いている。その先には白い蛙が不規則なタイミングで跳ねており、距離が離れると止まるし触れようとすると逃げてしまふ。

どこか愛嬌の感じられる白をはしゃぎながら追っていた。

二人はただ小さな雨蛙の背を追って歩く。

それからしばらくして遠くに雷が落ちた。

導くように跳ねるだけだった蛙は驚いたのか、不意に進路を大きく右に切る。

すると意外にもそれまで静かだった女の子は消えてしまった蛙を追って草むらに踏み入った。だが丁度隠れていた畔の端を踏んでしまったようで、濡れた雑草に滑った女の子は傾斜を転がっていく。

晃郎はぎよつとして畔を下りようとするが「だいじょうぶ」と下から呼び止められた。

「ケガしてない？」

「していないよ」

幸い草で肌を切ることも石で頭を打つこともなかったようだ。女の子はすぐに立ち上がった。自分の失敗を照れ臭そうにしながら頬についた泥を拭っていた。色素の薄い髪にもベツタリと泥がついている。

小さな白い手の甲に頬の泥が移るのを見てみると、女の子は唐突に動作を止めた。停止ボタンを押したように不自然なまま固まる。よく見ると額にびつしりと玉の汗が浮いており、晃郎には痛みを耐えているように見えた。

「ねえ、どうしたの？ やっぱりケガして」

その言葉の先を雷鳴が遮る。

間近で聞く打ち上げ花火よりも大きな音は空気と地面と、晃郎の体を揺らした。

近くに落ちたなあ。

雨の多い地域では茶飯事の出来事なので呑気に構えながら畔を滑り降りた。

少し転げそうになりながら女の子の傍に着地し顔を覗き込む。

「大丈夫？ 帰れる？ オトナよんでこようか？」

雷を先駆けにすぐ激しい雨が降り始める。

経験からそれを知っているので黙する女の子を揺すって急かす。

するとようやく女の子は顔を上げて目を合わせ 晃郎を思い切り突き飛ばした。

尻もちをついた晃郎を泥と草が柔らかく受け止める。咄嗟に地面に突いた手の平には鋭い痛みを感じた。

だが晃郎には突然の行動の方がショックで呆然と女の子を見上げる。すると実に冷めた、それでいて力強い目が返る。暗い空の下で奇妙に光って見えた。

嫌われたのかと思うと涙が溢れてばやつと視界が歪む。

そのとき畔に降るように下りて来た視界の右端に映る真つ黒な大きな靄^{もや}は、涙が何かを暈^{ほか}しているのだと思っていた。

黒いゴミ袋だろうか。風に舞うように留まっている。

目を擦って改めて見た時も靄はハッキリと、ぼんやりしていた。

アレは何だろう。

女の子を窺うと晃郎からすっかり視線を外してそれを睨んでいる。

「ねえ、アレなあに？」

ビクビクしながら女の子に尋ねる。

女の子は無視する。というよりも聞こえていないようだ。歯の根も合わないほど震えている。

なぜ怖いのか分からないけどこのままでは可哀想だ。

晃郎は涙をすすって立ち上がり畔を上って黒い靄と向き合う。と
りあえず追いついてしまおう。

「ダメ！ 近づかないで！」

「大丈夫だよ」

靄は近くで見ると更に大きい。

ヒーロー番組に出てくる怪物よりも大きいようで、晃郎が「あつち行けよ」と言うのと嗤うように体を揺らした。

更に膨れ上がる。

その巨大さに追い払う気持ちはすっかり萎えてしまい 代わりに湧き上がったのは胸を攪るような興奮だった。少年が恐竜に思いを馳せるように憧れを抱いたのだ。

記憶の中ではただの暗い不気味な靄は、幼い晃郎には違う何かに見えていたのかもしれない。

靄に向かって手を伸ばす。

指先が靄に触れると痛んだ髪のような感触で そこで記憶は途切れている。

これが水科晃郎が見て触って体験したと胸を張れる唯一の怪異譚であり、それ以降は一切奇妙な物を見ることはなかった。

深鎚寺、^{みつ}本堂。

晃郎は黒い法衣姿で錫杖を揺らし鈴のように鳴らしながら読経をする。

声の調子は年配の僧侶が唱える物には及ばないが高校生にしては低く落ち着いた沁み入るような音をしている。

目の前にいる学生服を着た少女は目を閉じて手を合わせ一心に耳を傾けている様子だった。少し離れた場所に母親が待機しており、こちらは期待を込めた眼差しで晃郎と少女を見つめている。

だが晃郎は決して期待に添うことが出来ない自分を知っているの
で居心地が悪かった。

数分後に経は読み終わり、晃郎は静かに一礼をして嘘を口にした。
「これで悪い物は取り除かれました。ご安心ください」

偽りと知らない親子は希望の光が差したような表情をして深々と頭を下げた。

晃郎はおおむね「実直そう」と評価される笑みを浮かべながら頷いてその確信を強めるよう促す。

もう心配はない、悪霊は抜われたのだ、と。勿論嘘だが。

謝礼として茶色の封筒が差し出される。苦い気分が口内に広がり
思わず顔を顰めてしまい、慌てて合掌して頭を下げて隠した。

何回も礼を言う二人に止めてくれと半ば本気で制しながら、本堂
を出て門から続く石段の下まで送る。

「帰り道にはお気を付けて」

二人はまた深く頭を下げてから橙色の緩やかな坂道を歩いてい
った。

疲れた。

晃郎はその姿が完全に見えなくなるまで待ってから凝り固まった

両肩を回し石段を引き返す。

重荷から解放された爽快感と柔らかな疲労が全身を巡っている。

このまま休めるのなら素晴らしい睡眠を取ることが出来るだろうが残念なことに仕事はまだ終わらない。

桜の花びらが散り始めているので境内には色あせたピンク色が大量に落ちている。石畳に張り付く前に掃除しなければならぬ。

憎たらしい、と目前を横切った花弁を掴んでくしゃくしゃにし、仕事とその原因を作っている父親への恨みを花弁一枚分だけ晴らした。

晃郎は最近妙に寺を空けがちの父親に代わり、一人だけ居る僧侶と一緒に寺の管理をしている。

経は読めるが得度という出家の儀式のみしか受けておらず、修行をしていない晃郎は本来ならば仕事に関わってはいけないのだろう。だが人手が圧倒的に足りない。

檀家の数も少ない貧乏寺では人を増やすことも出来ず二人で必死に仕事を捌いている状態だ。

行事、法要、葬儀、供養、お祓い、相談、その他。晃郎は後ろ三つを受け持っている。これが結構数が多い。

そして当然、寺に頼る者と言えば霊的な物件が大半なのだが、無能力なので何が何だか全く分からない。

そんな見えも感じもしない人間である晃郎には荷が勝ちすぎる。

なのでお祓いに関しては靈感があると自称している僧侶が担当していた。

しかしながらある日突然任されることになる。

お祓いは晃郎くんに任せていいでしょうか？

どうしてですか？

僧は一瞬言葉に詰まる様子を見せて「ほぼ全員が心因的な物だから」と苦笑いをした。

別に能無しでも構わないのかとその時は意気込んで仕事に就いたが、これが非常に精神を削り取る。

靈的な物の仕業じゃないと否定してはいけない。

彼らが望むのは良い聞き手であり、形式的なお祓いである。否定する者は不要だ。

断れば寺の評判と収入が逃げて行く。相手も切羽詰まって妙な詐欺師に引つ掛かるかもしれない。双方の利益を重視して晃郎は嘘を吐く。

互いが幸せになる嘘だが先程のような親子を見ると罪悪感は拭えない。

これならホンモノさんが来た方がまだましかもしれない。

寧ろ来てくれると嬉しい。そもそも最初はごく稀に来るというホンモノが見たくて仕事を受けたのだ。

だが現実はその上手くいず、病院に行った方が建設的な人々の相手をしている。抛り所を与えるという点では本来寺の役目として正しいが晃郎は今の仕事が好きではなかった。

錫杖を置いて竹箒を持ち替えた晃郎は、時折飛び掛かって来る柴犬を躲かしながら石畳を削り取る心意気で花弁を集める。

終わる頃には辺りは薄暗くなっていた。東の空はほんのり橙を残しているが、この場所は夜に向かってひたすら闇を濃くするだけだ。花弁の山に躍りかかろうとしていた柴犬を阻止して愚痴を言う。

「おう八チ公、今日も日が暮れたぞ。不健全な高校生活だ」

「ムサシですよ」

はて犬が喋った、と晃郎は尾を振る柴犬と目線を合わせて首を傾げる。

次いで聞こえた「ふざけないでください」という声が思いの外苛立ちを含んでいたので背筋を正し、柴犬ムサシの横に立つ僧侶に愛想笑いを送った。

晃郎と同じ黒い法衣は心なしか草臥れて見える。

「お帰り真明さん^{まことあき}」

真明は今年二十九になる僧侶だ。

渋い空気のせいで年齢より老けている。晃郎が高校一年の時にこ

の深鎚寺に訪れ、その頃から放浪を始めた父親の仕事の穴を埋めた。どう言う繋がりがあったてこの貧乏寺に来たのかさっぱりだが信賴を寄せるに足る人柄と仕事ぶりだ。

最近忙しさのせいで更に老けて見える。真明が後ろ髪に一本白髪を発見して落ち込んでいる場面を目撃した時には、晃郎は酷く不憫な思いに駆られた。

真明は僅かに目尻をひくりとさせて自らの呼び方を訂正する。

「……真明しんめいです。ただいま戻りました晃郎くん。ムサシは吠えましたか？」

「いえ全く。お勤めお疲れ様です」

「手伝いましょう」

真明は塵取りを晃郎の手からもぎ取り花卉の山にブスリと突き刺した。

竹箒の補助を必要としないでスコップのように乱暴に使いゴミ袋に入れていく。

「えらく腹が立ってますねえ」

「最後に回った檀家の方が私では駄目だと文句……いや、お願いされましてね。」

修行が足らんです。お気になさらず」

「親父に連絡しましょうか。そろそろ俺もあの放蕩野郎に怒鳴りたいし」

「放蕩などではありませんよ。便りがないのは誠玄様じょうげんがお忙しいからでしょう」

真明はそう言うてから三つあるゴミ袋を全部担いで石段を下りて行ってしまった。

晃郎は父親が今どこで何をしているか知らない。戻って来るたびに修行や金策などと言いついてはいるが本当かどうかは怪しい。

虫でも飛んでいるのか、何かを追って走りまわるムサシをぼつと眺めているとすぐに真明は帰って来て正体不明の笑みを浮かべた。

「晃郎くん。瑞代みすしろさんがいましたよ」

「いや、報告しなくてもいつも居るでしょう。アイツは」

「そうですか？」

すっ呆けながらムサシを撫でて寺内に入って行く。

明らかに勘違いしている様子だが訂正するのは面倒だ。

こつやつて顔を見に行く行動も勘違いを助長させるのだろうと晃郎は思いつつ、石段の半ばにある踊り場まで下りる。

そこで屈むと木に阻まれることなく道路の向こう側に横向きの鳥居が見える。その下では巫女姿の少女が竹箒を懸命に動かしていた。真っ白な肌が暗い中で映えている。

「瑞」

名を呼び終える前に少女は晃郎に冷たい視線を向けた。

そして軽く首を傾いで振り返ることもせず鳥居の中に引っ込んでいき、晃郎は片手を上げたまま固まるのだった。

あまがたみずしろ
雨蓋瑞代。

晃郎が目撃したと胸を張れる怪異の生き証人であり、あの冷たい対応でも一応晃郎の親友である。

恐怖と自戒

鳥居の前に延々と舞い落ちる桜を黙々と掃いていた瑞代は、ふと嘶きを聞いて顔を上げた。

見ると、森の茂みで白い鬘たてがみと銀鼠の体色を持つ馬のような生き物が後ろ脚で立ち上がり、目一杯首を伸ばして木の枝に引っ掛かった何かに噛みついていてる。

引っ掛かった何かはよくよく目を凝らすとそれは黒っぽい動物のようであり、更に目を凝らすと毛が抜けた猿のような物だと分かった。

額には二本の角が生えている。雑鬼だろう。

必死で逃れようとする雑鬼を馬は軽々引き下ろし、一口で食べてしまった。

瑞代が思わず「おえっ」と呟くと馬は顔をこちらに向けて歯を剥き出しにする。

「駒、お腹壊すよ」

駒と呼ばれた馬は抗議するように首を振って鳥居の奥に行ってしまった。

仕方がないヤツだと瑞代も首を振って再び掃除に取りかかるが、今度は足音を聞いて中断する。

「精が出ますね、瑞代さん。こんばんは」

草臥れた法衣を着る僧侶が、茶色混じりの桜色をしたゴミ袋を担いでいる。彼は向かいにある深鋤寺みづいに二年前から居る僧侶だ。この頃は忙しいのか身なりが疎かになっており、髪もあちこち癖毛が立っている。

「こんばんは真明さん。それ全部桜ですか？」

「真明しんめいです。全部桜ですよ。境内にある大桜も散り始めましたから」袋を指定のごみ収集場所に置いた真明は一礼して道を挟んだ向か

いにある寺に戻って行く。石段に差し掛かったとき足元に半透明のトカゲが纏わりつき少し体勢を崩していた。

瑞代は駒を呼んで退治させようか思案したが、真明が足踏みするとトカゲは煙のように消える。

しかしながら本人は何を踏んだかまでは分かってないようで首を傾げていた。

この町は古くから豊かな自然を保っているからか、妙な物が多い。それに比例して感覚が鋭い人が多いが、大抵は波長が合った。向こうから姿を見せようとしない限り真明のように「見える気がする」くらいで、瑞代ほどハッキリ見える人はあまり居ない。

不意に強く吹いた夜風の中に冷たいものが混じる。

夕月の浮かんだ空を仰ぐと翼を持った大きな影が山の方へ飛んでいた。近頃はあんな力のある者まで住みついている。

悪いものじゃないといいけど、と瑞代は竹箒で落ちていたゴミを引き寄せ、ついでに尾が二本ある鼠を強く払った。呆気なく霧散する。

実体を持たないような小物は決して生身の人間に敵わない。惑わされ引きずられることもあるが、強く意志を持っていれば決して負けはしないのだ。

しかし先の大きな翼の影などは違う。

「あれ、駒。機嫌治したの？」

何時の間にか傍にいた駒が鼠のような尻尾を寺の方に向け「コウロウ」と示した。

石段の半ばで晃郎が屈むようにして瑞代を見ている。何が楽しいのか晃郎はいつも笑顔か、それに類する柔和な顔をしている。

まず瑞代はハッとして晃郎の周辺を探り 何も居ない事に気付いて視線に険を含ませた。

まただ。

すぐさま鳥居に引つ込んだ瑞代は神社に続く蛇行した坂道から脇に入り、山に漂っている小物妖魔をひっ捕まえてその背に筆ペンで

「式」と書く。

取って返すと晃郎は肩を落として石段を上っているところだった。その背を指差して驚愕んだままの一つ目のイタチに命じる。

「あの石段を上っている人間を守るように」

行け、と放つと脱兎の如く走って行った。

瑞代はこうやっていつも晃郎に守りをつけているのだが、どうしたことが数日で自然消滅してしまうのが悩みの種だった。

「カホゴ！ カホゴ！」

「駒うるさい。引っ込んで」

駒が言うように過保護なのかもしれない。

暗がりに住む者達は瑞代のような力を持つ人間を積極的に狙うので、何の力もない晃郎は危ない場所に近付いたり、余程不運でない限りは危険が無いのだ。

だけどそれでも。

瑞代は掃除が面倒になって集めた桜を竹箒で散らし住居を兼ねている社務所に引き返す。

（なんで消えるんだろう。ムサシが食べてるとか？）

忠犬ならぬ霊犬ハチ公と瑞代が密かに呼んでいる柴犬は雑鬼を見つけると嬉々として襲い掛かっている。

しかし駒とは違い真つ当な犬なので食べているとは考え難い。

それに、守りと使役者は僅かながら繋がりがあるので突然消失すれば幾ら未熟者の瑞代でも気付く。

（じわじわと薄くなるように消えてるんだろうか）

それなら違和感を感じないかもしれないが、ゆっくりと消える原因が思い浮かばない。真明が何かしているとも思えない。

瑞代は頭を抱えて唇を噛んだ。

「分からん……」

「ソモソモモルヒツヨウガナイ」

「今日はよく喋るね」

そもそも、と真似て言い返す。

「駒も何かなのかハッキリしてよ。妖怪？」

問い詰めると駒は途端にダンマリを決め込み宙をパカパカ駆けてどこかに行ってしまった。

危ない物ではないのだろうが得体が知れない。

尤も、晃郎に言わせれば瑞代も得体が知れないのだという。宙に話し掛けている場面を何度も目撃されている。

社務所には誰もおらず、吸い込まれそうなほど静かで真っ暗だ。

明かりを点けても冷たい雰囲気は消えない。

慣れているので気にはならない。

普段着に着替え、念の為に一つ目イタチの繋がりを確認するとしつかり返事があった。

（ニンゲンハコンビニメシヲクツテイルゾ！ ジツニマズソウタ！）
（そんな報告要らないから）

小さな妖魔だと知能が低いのかたまに命令以外の事をする。以前の妖魚などは一緒に風呂に入って聞きたくもない実況をした。

これではストーカー染みている。

だが賢しい妖魔だとそれはそれで厄介だ。

過保護を止めてしまえばいいとも思うが その刹那に昔の恐怖が記憶の下層からジツと瑞代を見上げてくる。

澱おりのように濁った視線はあの時から瑞代の心臓にこびり付いて離れないのだ。

逸神神社いつみに生まれた雨蓋瑞代あまふたみずしろは、五歳の頃にはハッキリ怪異を目に映すようになった。

空を見上げると三本首の鳥が舞い、地面を見下げると雑鬼たちが徘徊していると言った具合に生き物とも何ともつかない者達が視界に入り込む。

初めは恐怖心で神社の神域に籠ったが、段々と慣れていき、いつ

しか当然の風景になつていった。

違う人には、あまり言つてはいけないよ。

見える側にいる両親は「違う人」と言つて瑞代達と普通の人を区別していた。

自戒しろと言う意味だったのだろう。私たちは変な物達を引き寄せてしまうので、違う人を巻き込んではいけないのだと。

雨蓋一家は一線を引いて生活をし、今もそうやって地域の中で生活を続けている。

それでも当時の瑞代の目には両親と地元の人たちはとても良い関係に映っていたし、実際そうだったのだろう。

だが年端もいかないうち子供であつた瑞代はそんな穏やかな関係を築くことが困難で、妙に気を張つてしまい遂には見える力と引き換えのように友達を失つた。

その頃の駒はまだ形も光の球で喋れもしなかったが、よく瑞代を励ましたのでそのお陰で寂しくはなかった。

瑞代は近寄る努力も反発することもなく駒と過ごし、他の子達が公園で遊ぶ中で探検などに精を出していた。

そんなある日、いつもの通り一人でいると公園にいた一人の男の子が寄つて来て「あそぼ」と手を差し出して、男の子の手と笑う顔を交互に見詰めた瑞代は、何となくそつと手を重ねた。

それが晃郎との出会いだ。

晃郎が何を思つて除け者に近付いて来たのか現在に至るまで解明はされていない。訊いても本人は忘れていると言つので永遠にそのままだろう。

駒が居て寂しくないと言っても喋ることはできず、話し相手を得た瑞代は探検で見つけた場所や最近の出来事を一気に話した。そこで自分が会話に飢えていたのだと知る。

瑞代の話を面白がつた晃郎は自分も探検すると言い出し、一緒に行動するうちに二人は誰よりも仲良くなつていく。

だが親友と呼べる程になつても瑞代は自分の見る世界を決して晃

郎に言いはしなかった。晃郎は「違う人」なのだと充分に理解していたからだ。

しかし転機が訪れる。

それは二人が小学校の三年生に進級した日だった。

一緒に下校している時に小物が道を塞いだので駒が追い払う。その様子を晃郎が目で追っていたのだ。

「今なにしたの？」

「……ううん、なにも！」

疑問にそうやって答えはしたものの、瑞代は嬉しかった。

もしかしたら自分と同じかもしれない。そうすれば隠す必要もなくなるのもつと仲良くなれる。

早く見えないかと駒を晃郎の頭に置いたりしていると、多少なりとも能力が触発されたのか、駒を「ホタルだ」と言うこともしばしばあった。見えるまであと少しに迫っているように思えた。

そして、運命の日は足音も立てずにやって来る。

その日は大雨を予感させる空模様で、恐ろしく天が低かったのを瑞代は覚えている。

暗雲は針でちよつと突けば決壊しそうな危うい均衡で水を溜め込んでいるようだった。

「ふりそうだねー」

「ねー。どうする？ 帰る？」

朝は昨晚の雨が嘘のように晴れていたのに、学校が終わると途端に今の空に変わってしまった。まるで早く帰れと促すようだ。いつもはいる雑鬼も妖魔も大雨を予感してか見渡す限りどこにもいない。駒は惑うように忙しく飛びまわって瑞代の背中を突いていた。結構痛いので叩き落とす。

それらは明確な予兆と駒の警告だったが瑞代は察する事が出来なかった。

「あっカエルだ！ 色ヘンじゃない？」

「え？ ……ホントだ」

帰り道にのど真ん中に小さな白い蛙が座っている。体色に反した真つ黒な瞳が二人を眺めるようにしていたが、すぐ回れ右をした。

晃郎が「にげちゃった」と残念そうに呟くと　聞こえたように白い蛙は止まった。

あれは、こっちの生き物ではない。

「ミズシロちゃん、行こうよ」

「……うん。追っかけながら帰ろっか」

何かおかしい。瑞代は考える。

晃郎は蛙が見えるのに駒の事を指摘しない。それは蛙が意図的に姿を見せているからだ。

どこか危ない所に導かれているのかとも考えたが、蛙は二人がいつも辿る帰り道を間違わずに進んでいる。なぜそんな事をするのか瑞代は分らず不気味に感じた。

白い蛙は二人を引率するように跳ねて行く。

痺れを切らした瑞代は駒に捕まえるように言ったが、駒は揺れるだけで何もしない。

そこで自分の手で捕まえようと決心する。しかし。

「あっ」

遠くに雷が落ちたとき慌てたように畔の草むらに隠れてしまった。思わず追って一歩踏み出と、平らだと予測していた地面は斜めになつており、濡れた草に足を取られてそのままバランスを崩して転げ落ちた。

駒がすかさず守つたので怪我は無かったが泥がベツタリと髪に顔にとくつ付き気持ち悪い。

蛙は、と茂みに目立つ筈の白を探すも見つけることはできなかった。

「ケガしてない？」

「していないよ」

一体何だったんだと理不尽を覚えるが、失敗を見られた気恥かしさが勝って俯く。

手の甲で泥を拭い 瑞代は目の端に黒い物を映してギクリと固まった。

「ねえ、どうしたの？ やっぱりケガして……」

大きな雷鳴が空気を裂く。

空が白く発光し、畔の上に降り立った強大な黒い影を一層浮き立たせる。

悪意を含んだ視線を感じたとき耳鳴りが脳みそを壊さんばかりに頭の中を掻き混ぜ、全身から冷や汗が吹き出した。

駒は激しく瑞代の周囲を旋回して威嚇していたが、アレに対して牽制を成し得られるとは到底思えない。

呼吸が無意識に早くなる。汗が目に浸み入るが強張って瞬きすら出来ない。

逃げないと死んでしまう。食われてしまう。

生死の基準がまだ曖昧な年頃だったが本能的に悟ってしまった。

「シセン、アワセス、ニゲル、ジュンビ」

初めて喋った駒は駆け出す準備を促す。瑞代は頷くかわりに生唾を飲み込んだ。

滑り降りる音を聞いて視線をずらすと、晃郎が瑞代を心配そうに覗き込んでくる。

畔に居てくれた方が引つ張って逃げる時に都合が良かったが、その優しい視線に勇気づけられた。

「だいじょうぶ？ 帰れる？ オトナよんでこようか？」

「コイツ、オイテク。エサヲクレテヤレバタスカル」

畔の方を見ないように顔を上げる。晃郎を見る。

駒は瑞代を急かすが、瑞代は腹を括った。

置いて逃げなどするものか。

力の限り晃郎を突き飛ばす。草むらに転ばせて少しでも影の視界から隠れるようにし、瑞代はあらゆる力を振り絞って動きの悪い首を無理やり畔の方、影のいる向に巡らせた。

そこには大量の蠅が舞っているような黒い靄もやがあった。

奥に何か酷く不吉な物が居る。初めて目にする、大物の妖魔だった。

（あなたの視線は力を持つから、逃げないのなら睨みなさい）
母の言葉を思い出して胆力の限り睨み付ける。靄は僅かに身を揺するが、それ以上の効果はない。

情けなく震える歯の根を噛み締めて睨み合いを続けていると、何を思ったのか晃郎が畔を上っていった。

「ダメ！ 近づかないで！」

制止の声を晃郎は軽くいなしして靄の前に立つ。

なぜこのタイミングで見えてしまったのか。瑞代も畔に上がろうと思うも、体は恐怖で萎えてしまっている。

晃郎は、最初は向かっていく様子を見せた。だがすぐに圧倒されたように目を見開き、そして感嘆のような息を漏らして 手を伸ばす。

本人は気付いていないようだが突き飛ばしたとき手を切ったのか血が滴っている。地面に落ちた赤い雫を靄が動いて舐め取る。

靄は正体不明の体を揺らして嗤ったようだった。靄に目を凝らすと黒の中に微かだが大きな口が見え、舌舐めずりをし、地獄の釜のようについて小さな手を迎えようとしていた。

「やめて！ 食べないで！」

友達の危機に際してようやく体が動いた。

畔に上って手近な石を投げつけると口は閉じたが、黒板を引つ掻くような嗤い声の後に突き出た獣の手が晃郎を掴む。気を失った晃郎はされるがままに引つ張られる。

瑞代は絶叫して醜悪な靄の手を払い落そうと駆け寄り、手を伸ばした。

ミズシロ、と叫んだ駒が間に割り込み 光の球でしかなかった体が色を持った。

光を失い灰色味を帯び、縦横に引き延ばされ、芸術のように形作られていく。

白い鬣が風に靡き、銀鼠の体毛は筋肉に沿って波打ち、暗い空から降る僅かな光を反射して艶を帯びている。力強い四肢が伸び、黒い蹄が地面を搔く。

大きな馬に変化した駒は、驚いたように手を離れた霧を後ろ脚で蹴り飛ばした。だが大して効いてはいないようだ。

「コマ、にげよう！」

追撃しようとする駒を制止する。

即座に身を翻した駒は晃郎を抱いて座りこむ瑞代を鼠のような尻尾で拾い上げて背に寄せ疾走した。

景色は瞬く間に後ろに向かって流れて行く。

振り返ると既に遠くなった霧が追ってくる気配を見せたが、見計らったように降り始めた天の底が抜けたような雨が真っ白な線を作り霧と瑞代達を遮断した。

無事に神社まで辿り着く。

そこで額を寄せあつて何事か話していた両親と晃郎の父親に事情を話し切ってから、瑞代も意識を失った。

「二人とも不運だった。ただよく生き残れたと思います。瑞代ちゃんが目覚ましたら晃郎を助けてくれたお礼を言いたい。

ただ 喰われたのか元々育たないで枯れる芽だったのか、晃郎はもう見えてはいないようです」

晃郎の父、誠玄じょうげんが言った通り、晃郎は二度と瑞代と同じ世界を見ることは無かった。

それから約十年が経った。

晃郎は時々嬉しそうな顔で「覚えてる？」と瑞代にあの時の出来事を確認する。

その時の晃郎は怪異を見たと言う稀有けうな経験を誇るようであり、またあの霧を望むようでもある。

その時の瑞代は罪を突き付けられているようで苦い物を感じる。自分が関わらず、自然のまま緩やかに能力の成長を待てば、あの霧を見ることがなく、霧に触れることもなく、憧れを抱くことも無

かつただろう。

枯れる芽、と誠玄は言ってくれたが有り得ない事だ。

私は間接的に晃郎の何かを奪ってしまった。

失ったものを求めるように晃郎は暗がりに住む物達に興味を持っている。

全く見えはしないので関われないと思うが、瑞代は自責の念もあつてこれからも晃郎に守りを付け続けるのだろう。

微々たる異変

緋知町ひしりというのは緋知山を源流とする川に南北を分断されており、その川から水路を引いて町の隅々まで小さな川のように広がっているため水四里町みずしりとも言われたりする。

緋ではなく水を知るという語呂合わせだがあながち間違っていない。それどころか水四里町の方がしつくりくる景観なので、観光客向けのパンフレットには随所に緋知ではなく水四里と書かれている。流れる川の名は水失みずつせといった。

こちらにもまた雨量によつては氾濫する川としては矛盾した名称だが、幸いなことにそのまま呼ばれている。

早朝と言うには少し遅い頃、晃郎はその水失川に沿って造られた土手を半ば眠気でぼうつとした頭で辿っていた。

町は高地にあるので四月半ばに差し掛かった現在も朝は冷え込む。凍をすすって腕時計に目を遣ると八時十五分を示しており、晃郎は働かない脳内に「遅刻」の二文字を浮かべて、そのままの速度で登校を続ける。

晃郎の通う青ヶ橋高校は自宅から十五分緋知駅まで歩き、そこから電車で四十分揺られた所にある。

どう頑張ろうと完璧に遅刻であることは分かり切っているため悟った眼差しをしていると、制服の胸ポケットが震えた。

無視するが中々鳴り止まないなので仕方なく取る。

「もしもし」

「おはよう。今どこ？」

瑞代だった。同じ高校だと言うのに三十分前さっさと先に行つて

しまった瑞代からの電話だった。

低く落ち着いた声で、喋る速度もゆったりと余裕のある様子なので晃郎は時々目上の先輩と話すような気分になる。

「え、今はー……」

緑が芽吹き始める緋知町を見渡して言った。

「電車の中」

「どこでもいいけど、貸した現代社会のノート。今日授業あるからね」

「やっぱ忘れた！」

晃郎は間髪入れず通話を切って今来た道を猛然と逆走する。

青ヶ橋高校の校訓は自由、自立、自律というフリーな三原則を基に成り立っている。

それが校風に反映されており、成績が上位であれば服装や髪色などの自由は黙認され、血の汗を流す努力で上位陣に食い込む晃郎の遅刻も見逃されることが多い。

涼しげな顔で学年一位を掠め取って行く瑞代などさぞ優遇されるのだろうと思っていたが、どういうわけだか数人の教師からは受けが悪かった。

特に晃郎がノートを借りた科目、現代社会の教員は何かと瑞代を目の敵にしている節があるので、忘れたなどと言おうものなら嬉々として攻撃してくるだろう。

寺に着くと真明が作務衣姿で草むしりをしていた。頬に土が付いている。

晃郎を見ると手を止めてニヒルに口元を吊り上げた。深い渋みを感じさせるが本人は普通に微笑んでいるつもりのようだ。

「晃郎くん。悪心ですか？」

「サボりじゃないです。忘れ物。真明さん、今日は法要とか無いの？」

珍しい、と含めると真明は楽しそうに肩を竦めてから草をゴミ袋に放り込む。

「ありませんが、お昼過ぎにお被いを希望する人が来ます。いわゆるつきの品を持ってくるようです」

「……本物？」

大体は偽物だからと晃郎に任せた仕事だ。多忙な真明が応対するということは、と瞳を輝かせると照れたように短髪を掻いた。

「何か特別なことが出来る訳でもありませんが」

「それでも全く駄目な俺より凄いいじゃないですか。いいなー俺もちよつとは見てみたい」

羨ましさを隠さず言うとは今度はキュツと厳しい表情に変わり、居住まいを正す。晃郎よりも僅かに背が低い真明だが、そうすることで随分大きく威圧的に見えるから僧侶というものは不思議である。

「晃郎くんはある意味、とても恵まれているんですよ。見えない方が良いことも沢山ある」

「例えば？」

「顔が目玉でびっしり埋め尽くされた血まみれの死霊を見たときです。さ、早く学校に行きなさい」

戒める^{いまし}為に言ったのだろうが、その時のことを思い出しか真明は顔の色を青くしている。そこに柴犬のムサシがやって来て真明の

後ろに向かつて激しく吼えた。

木陰にいた小鳥が面喰らったように大慌てで飛び去って行く。

「うっ噂をすれば！」

それ以上に真明は慌てた様子で、悲鳴のように言って本堂に走っていった。良く分からないが逃げたらしい、とその場で跳ねて宙を咬むムサシを見ながら晃郎はハツとする。

「電車の時間が！ 真明さん原付借りますよ！」

自室に置いてあるノートを引っ掴み取って返し叫ぶ。

遠くに聞こえた「今日は使いませんからどうぞ」という声はいつも通りの調子だ。何かから無事逃げ切ったのだらうと晃郎は予想して再度駅に向けて出発し、無事に本数の少ない電車に乗ることに成功したのだった。

青ヶ橋高校は開校五十年の古い歴史を持つ学校だ。

歴史の長さに比例して所々汚いが、県を中心にあり、偏差値もそれなり、学校自体の評判も良い。田舎の県から脱出したいと願っている、都会に野心を持つ人間が割と多い。

ただ、近年スポーツにも力を入れ始めたためスポーツ推薦で入学する者も増えている。運動と勉強を両立できる者は少なく、学力はピンキリだ。

晃郎は前年まで問題児学級だったが三年に上がると同時に作られる、二つある特別進学学級の一つに放り込まれた。

普通のクラスは授業中でも微かにお喋りの音がするのだが特別進学クラスは全く無音だ。堅苦しそうにしている教師もいる程で、顔合わせの時は呼吸一つも気が抜けないと言った緊張感が漂っていた。

晃郎はクラスメイトの無言の圧力を覚悟して三時限目の後半、三

年二組の教室に忍び入る。

まず教卓を見る。タイミング良く教員は席を外していた。幸運を喜び、突き刺さる一瞬の視線たちを躲して、何食わぬ顔を装い席に着く。

ドア側の一番後ろが晃郎の机だ。良く遅刻する晃郎への配慮として友人が仕組んでくれた席だった。

真隣、つまり二列目の一番後ろにその席割りの神様は両腕を伸ばして顔を机に伏せている。偏食で案山子のように細いが、それを除けば成長期を順調に過ごしたのだらうと思わせる身長で、小さな机はみつちりと友人の上半身で覆われていた。

息苦しいクラスでもやって行けるのはこの友人のお蔭だと晃郎は思っている。自分と同じ問題児学級から上がって来た人物であり、学力重視を体现する外見だ。

「おい月丘」と晃郎は萎びた野菜を友人に重ね合わせながら骨ばった肩を揺する。

三回揺らしたところで月丘つきおか陽太はよった大義そうに顔を上げ「うるせえよ」と唸って頭の位置を元に戻す。色を抜いた髪の毛より悪いように思えて小さく尋ねた。

「どうした？」

「遅れて来て、良かったな」

脈絡のない低い返事に首を傾げる。

「なんでだよ」

「うつ、腹が……」

「食中毒？ 大変だな」

「うるせえアホかお前は！」

冗談のつもりだったが陽太は目を剥いて怒鳴り、犬が吼えたよう

な音の余韻が教室に反響する。慌てて人差し指を口に当てるがそれ以上陽太は叫ばず体力を使い切ったかのように机に額を落とした。強烈な腹痛のようだ。

晃郎はこっそりと周囲を窺う。クラスメイトは黙々とノートに向かって勉強しているフリをしており無関心を装っていた。中には笑みを向ける者もいたがそれはほんの少数派だ。

特進クラスの弊害だ、と晃郎は思う。

真面目なのは良い事だが、それが極まって堅物に進化すると厄介な物で、自分の常識規範から外れている者には容赦ない侮蔑の視線を向けてくるのだ。大体のクラスメイトはヒヨコのような頭の陽太や入学早々に停学事件を起こした晃郎などにあまり関わりたくないというスタンスが基本だが、中には陰で口汚く罵る者もいる。

クラス替えをして急に強くなった風当たりは勉強について行けるかという不安を発散しているというのが陽太の見解で、晃郎もそう思うことにしていた。人好きなので嫌われていると思うのは胃が痛む。

教師がいらないのにシンと静まりかえった室内に、問題児学級の馬鹿騒ぎを懐古しながら三時限目は終了した。結局教師は帰って来なかった。

「おい月丘。保健室行くか？ それともトイレか？」

陽太はあれ以来ピクリともしない。流石に心配になって声を掛けると、陽太はヒョイと顔を上げて眉を寄せた。

「ぶっ殺すぞ。殴られたんだよ」

「おー生きてた。よかったよかった」

無事に回復した姿は何時もの通り不良で「ぶっ殺す」に反応して周囲の生徒が怯えたように肩を揺らす。

それよりも殴られたと言ったか。

「また喧嘩か。良くないな。ここは一つ大人になって黒染めしとけ」
「喧嘩じゃない。テメエに言われたくないわボケ」
「それなら何だよ。一方的に殴られた？」
「違う」

そう言つて目を伏せ、しばし黙り込む。外見から想像がつかない、思慮深い性格をしているのだ。だが短気でもある。相反する二つをどうやって折り合いを付けているのかが不思議だ。

「殴られたんだよ。誰かに。顔は見なかった」

熟考の果てに出て来た言葉に晃郎は思い切り顔を顰めた。

「何だよそれ、通り魔か。もしかして遅れて云々ってそれか？ 何人が犠牲になったんだ？」

「全っ然違う。七組の馬鹿が乱闘起こしたんだ」

「そこで何で通り魔に繋がんのか全く分からん」

「だから、今から説明するって所だろうが！」

怒鳴った陽太は腹を擦り少し表情を歪める。腹よりも短気ゆえに負担のかかる脳の血管を気にしろと晃郎は心の中で忠告した。

「何があつたわけでもないんだが、一限目の半ばくらいにいきなり妙な雰囲気になってな。突然みんな苛々し始めたみてえで、俺も何だか腹が立ってた。そんな中で二時限目の最中にあつちの廊下が騒がしくなつて」

と、陽太は七組のある右の方向を指す。

「先生が見に行っただけど収まるどころか尚更五月蠅くなった。その上女子の悲鳴まで聞こえたもんだから、つい、気になって見に行っただ」

「首突っ込みに行っただな」

「誰が突っ込むか！……珍しいことにガリ勉共も何人が着いて来てたっけ。俺より前に出ようとしねえからそれもまた苛立った。野郎の盾とか笑えんだろ。まあ情けないことに廊下の先に既にできていた野次馬の壁を見て引き返して行っただ。俺は後ろから覗いたんだが真ん中付近で七組の奴らが暴れていて、それがどうも普通じゃないようだった」

「危ない感じってこと？」

それには陽太は肯定せずに苦い顔を作った。思いがけず痛い所を突いてしまったらしいと思っただ晃郎は「それで？」と先を促す。

陽太は深く息を吐いた。言い辛そうな様子からここからが本題なのだろうと察せられる。

「よく考えてみりや他の奴らも変だったんだ。誰も止めに入んねえし……俺も、おかしかったと思う。そこから記憶が飛んだ。殴られる直前まで覚えてねえんだ」

真剣な三白眼を真面目に見返す。すると一瞬ホツとしたように顔を緩めて、また厳しい表情に戻り続けた。

「腹を殴られて痛いつて感じた時に自分のいる場所が変わってたんだよ。気が付けば喧嘩が近くなってた。野次馬をかき分けて前に出てたらしい。慌てて教室に戻ったよ。自分が何仕出かそうとしてたのか分かんなくてな」

陽太は自分の手の平を見つめ握って開くを繰り返す。そうやって動作の正確さを確かめるようにしながら、手に不審を混じえた視線を向けている。

「後に聞いた話じゃ無関係な野次馬も何人かフラフラ入ってって喧嘩に参加したんだと。乱闘参加者は揃って停学らしい。危うく俺もそうなるところだ。結構いたからな、停学者がいる組の担任は緊急会議中」

教師がいない理由を知って納得しながら晃郎は友人の様子を窺う。動揺しているように見えた。

陽太は良識的な人間だ。理由なく喧嘩しに行こうとした自分の行動にショックを受けているのだろう。

「場の空気が悪かったんだろ。気にすんな」

気休めでも、と寺に相談しにくる人に向ける和らげた声を掛ける。「キモイ」と辛辣だったが深かった眉間の皺が浅くなった。

晃郎は休み時間になっても囁くような声しかない教室を見渡す。棘のある雰囲気は脱したようだがどこかそわそわした様子を見せる者が多い。そう言つと陽太は鼻で笑った。

「あんな大がかりな喧嘩は俺らの入学式以来だからな。優等生ぶってるが内心では興味津々なんだろ」

「へえ……あ、俺ちよつと行ってくる」

晃郎にとってあまり触れてほしくない話題があつたのと、丁度ノートを返す用事があるのでそう切り出すと、陽太は目を細めた。どこなく陰が含まれている。

「一組か」

「ああ」

「雨蓋さんか」

晃郎が黙って借りたノートを目の前で振ると、陽太は猫じやらしを追う猫のように目を揺らし、ハツとして拳骨を振り上げる。攻撃を無事に避けた晃郎は爆笑を腹の内では堪えながら「行ってくる」と席を立つた。

「デメエ、覚えてろよ。……そっぴや雨蓋さんも現場にいたっけ」

「アイツも結構、野次馬なんだな」

そう言う晃郎も興味がある。

瑞代からも詳しく状況を聞いてみようと思いつながらドアから出るとき、「今日、現代社会ないよな」とぼやく声を聞いた。

首を傾げながら一組に行き、教室の後ろに張ってある時間割のプリントを見遣る。確かに今日は現代社会の科目がない。

几帳面な性格なのに珍しく間違えたようだ。

だがそのお陰で刺々しい雰囲気の中登校せずに済んだ。晃郎は瑞代の勘違いに感謝しながら窓側の列、一番前にある瑞代の席にノートを返しに行く。

「あれ、いない」

机まで後五歩という所まで近付いた晃郎は、そこでようやく瑞代が席に居ない事に気付く。

いつも席に座っているというイメージがあつので居ると思い込んでいた。首を捻って机を見詰めていると、

「おはよっす。瑞代ならサボってるよ」

「山岸。^{やまぎし} おはよ。……は？ サボりつて？」

振り返った先にはウェーブの掛かった黒髪を横に纏めた、くりくりとした瞳の女子生徒がニヤニヤと笑っている。「残念だね」と含むように言って片手を晃郎に向けた。

「返しとく。というか私もノート見たい」

「じゃあよろしく頼むよ」

「はいはい」

山岸瑠夏^{やまぎし}は受け取ったノートで肩を叩きながら自分の席に帰って行く。晃郎はその動作に深い年季、もといば臭さを感じつつ自分も教室に帰って行くのだった。

恨めしいと漂う物

人は他者との差異を意識的に、あるいは無意識的に探す。そして自分の観点から比較を行い己の立場を認識するのだ。人間はそういう生き物だ。

人気者がいれば逆もまた然り。頭の良い者がいれば、逆もまた然り。

だがそうやって比較をすれば劣る者が出るのは当たり前のこと、それを公おおやけに示してしまうと問題になる。よって感情や関係面は学力などと違い順位付けをされることはない。しかし余程の鈍感ではない限り皆自分の位置を認識しているのだ。

優劣の中で現れるのは妬みであり憎しみであり、羨望であり目標である。予測できない多大な正負の感情が生み出されていき、人は折り合いをつけながらバランス良く生活をしている。

だが無数にいる人間の中では勿論、逆も有り得るのだ。そしてそれは正に傾くより負に傾く方が圧倒的に多い。

著しく均衡を崩した薄暗い物は時にその人自身を鬼へと変え立て、時には自身を殺す凶器へと変わる。

そんな危険を孕む強い感情だが探そうと思えば其処此処にある。そのように一般的で辺りに散らばっているのです、いつからかその感情を媒体とする火が存在するようになった。

様々な呼び名があるがそれは総じて怪火と括られる。

関わりと碌なことが無いので今も昔も、人は全力でその火を忌避しているのだった。

濁った乳白色の床が真っ直ぐ伸びている。

最近の大掃除でワックスをかけたのだが、生徒や教師に踏みしめられた廊下は既に艶を無くして汚れている。窓を嵌め込んだ壁は磨かれた状態を保って不自然に白い。だが窓自体は雨と埃で汚れている。

その窓からは快晴に浮かぶ太陽の光が差し込む。これは明るいと言ふより眩しいと言ふだけであり、倉庫の中にいるような廊下の薄暗さを払拭する事は出来ない。

廊下には光を鈍く弾いて舞う埃に時々強い光度が混じっていた。

火だ。

それらは決して落ちることはなく、緩やかに空間を闊歩する。緑や赤、青色をした大小の火は陽の光に負けて薄くなりながらも消えず、時折餅を千切る様に尾を引いて分裂していた。

屋上に続く階段の前に立つ瑞代は凝り固まった肩を回して火を退治して回ったこの午前中を振り返った。

ここまで減らすのに何分掛かった事か。とにかくこれで終わりだ、と廊下の端にある大窓を開ける。十センチ程開けた時点で強く風が吹きこみ髪が大きく乱れるが、構わず一気に開け放つ。

春の強風が待っていたとばかりに吹き入り、廊下を走り抜け、薄暗い原因となっている者達を蹴散らしていく。

瑞代はゴウゴウと耳元をなぶる風の鳴き声を聞きながらその光景を眺めていたが、ふと感じた悪寒に左手で顔を庇い、直後の鋭い痛みに一步下がった。浮いた前髪のが切断さ廊下のゴミの一部となる。下がらなければ額が切れていただろう。

瑞代は左手を庇うように押さえ込み顔を上げて十メートル先にある褐色の旋風を睨み付ける。すると旋風が押し潰されて中から子供大のイタチに似た動物が弾かれたように転がり落ちた。何が起こったか分からず顔を左右させるイタチは前脚部分が鎌になっており瑞代の血がべったり付着している。

鼬は毛を逆立て警戒しているが瑞代を獲物と定めたよう逃げ

素振りはない。身を屈めて再度襲いかかろうとし　背後から音もなく迫っていた駒の蹄ひづめに強かに踏まれた。

「駒、散らかさないでね」

駒は齧れる物なら何でも食べ栄養に変えている。今回の獲物は何時よりも大きいので、その分だけスプラッタな光景が展開されると思えば顔を歪めると駒は首を振った。「食べナイ」と言って脚を退ける。イタチはこれ幸いと身体を起こして逃げようとするが、瑞代はハツとして身を屈めた。と、次の瞬間に弾丸の様な速さでイタチが頭上を横切り、窓枠にぶつかりガラスを割って空に消えていく。

「やりすぎだつて！」

退治するにもやり方というものがあるだろう。

頭を痛めた直後に案の定、音を聞き付けた生徒達が教室の窓から顔を出し目を丸くしている。そしてすぐ亀のように首を引っ込めた。教師に報告しているのだと思うと苦い物が心中に広がり、そして予想通り教室のドアが開き初老の穏やかそうな女性教師が出て来た。

「雨蓋さんじゃない。あら、窓が割れているわね」

何とでもない風に言っただが内心穏やかではないだろうと瑞代は察した。

現代文の教師である藤守智子ふじもり ともこは普段から困ったような顔付きであり、瑞代を前にすると更に深く眉尻を下げる。まるで厄介なものを見てしまったとも言わんばかりで、今もその顔をして瑞代の居心地を悪くさせた。

瑞代は怪我をした左手を背に回して窓を見る。

「何かが飛んで、ぶつかつたみたいです。今日は風が強いから」

嘘は言っていない。智子は納得したようだがやはり困つたように頬に手を当てた。

「そうだったの。怪我はしてない？」

「大丈夫です、けど……」

瑞代は廊下の先を見て思わず「けど」と付け加えて眉を顰める。智子は瑞代の視線を辿つて振り返り「ああ」と合点したがそれきり何の言葉もない。関わりたくないという態度に助成を諦め、肩で風を切つて歩いてくる教師の到着に身構える。

「藤守先生、どうしましたか？ 雨蓋。お前窓を割つたのか」

「違います」

「じゃあ誰がやつたんだ」

「強風ですから、誰とも言えませんけど」

教師は声から受ける印象とは裏腹に神経質な顔立ちをしている。
はきやませいじゅうつ
萩山静治郎という現代社会の教師で生徒を見下すべき生き物だと認識している節がある。勿論生徒達は毛嫌いしており、無論瑞代も嫌いなのだがその強度は遥かに一般生徒を上回る。

全ての始まりは、初めの授業だった。

初回ということで瑞代は他の生徒と同じく真面目に静治郎の話を聞いていたのだが、唐突に「身が入っていない」と名指して怒鳴りつけられた。唐突な冤罪の晒し上げに声も出ず驚いていると「初回の授業で寝るとは何事だ」と続けて怒られ、流石に反論すると「教師に反抗するな」と立場の強権で弁明すら聞き入れられなかったのだ。瑞代の何が彼の気に触つたのか分からないが、どうも憎まれて

いるような気がする。理由は知らない。

それまでどちらかと言えば和やかだったクラスの空気は一瞬にして痛い緊張に満ち、入学当初という生徒が互いに互いを知らない時期だったこともあって瑞代はその後しばらく不真面目な生徒として級友から評価を受ける羽目になる。

授業の回を重ねることに不名誉は薄れ、反比例するように静治郎の悪名は濃くなっていくのだが、その時の反抗心は今でも胸の中に残る。

これによって瑞代は成績トップを勝ち取り続け、代わりに友情という物に対して斜に構えているので交友関係は極僅かな線しか描けなかった。

瑞代はその天敵の右肩に火が灯っているのを見つけて見捨てようかどうか束の間悩む。

憑けつばなしだと段々身体に影響が出る。精神か肉体か、あるいはその両方かもしれない。となればコイツを駆逐する絶好のチャンスではないのか。

「先生、肩に埃が」

「あ？ 痛っ！」

瑞代は憎しみを込めて右肩を叩く。顔を歪めた静治郎はすぐさま怒鳴ろうと口を開くが本当に手に残る埃を見せつけられて押し黙り、敵意が裏側にたつぷり籠った目付きで「悪いな」と呟く。智子は二人の顔を交互に見て、幾分か同情的な視線を瑞代に寄越していたが仲裁に入ろうとはしない。良い人でも悪い人でもないという典型のような人だ。

「それはそうと、雨蓋。窓を割った経緯を説明しろ」

「聞いてなかったんですか？ 風ですけど」

「じゃあ何で外側に割れているんだ？」

「私に聞かれても困ります。……怪我したんで保健室に行っても良いですか？」

瑞代は言うつもりのなかったパツクリ割れた傷口を目の前に突き出す。「ぎゃあっ」と思いの外静治郎に効果を発揮したようで血色の良かった顔色が途端に色を無くした。それでも尚行かせまいとしてか嫌味の口を開こうとする腐った根性は見上げたものだったが、階段の方から瑞代への援護射撃が入る。

「藤守先生。と、萩山先生。お疲れ様です。怪我人ですか？」

「ああ、^{かけい}寛先生」

「あれ、雨蓋さんか。……それ、病院行きのような気が」

今まで物に徹していた智子がホツと息を吐いて瑞代に目で合図する。

瑞代は一礼して養護教諭の^{かけひばる}寛繁春の手招きに応じる。階段の半ばで少し後ろを覗き見ると神経質そうに眉を怒らせる静治郎と目が合い、睨まれた。駒がすかさず反応して「無礼ナ奴」と尻尾で膝の関節を狙い撃ちしたので静治郎は膝から床に落ちる。

音を聞き付けた繁春は白衣を翻して振り返り、しかし声を掛けるでもなく再び前を向いて進む。薄つらとくまの浮く目を瞬いて見なかったことにしたようだ。あまり静治郎を好きではないのだと瑞代に知れる行動だが本人は気にしていない素振りだった。

「叱るわけではないが、授業中だぞ。あんなところで何をしていたんだ？」

「体調が悪いから保健室に行こうかと思ったんです」

階段を下る最中に問われた言葉に瑞代は嘘を吐く。異変を駆除し

ていたなど気が違ったのかと思われては堪らない。

今日体調不良を訴えた三年生は結構な数いるはずなので自分もこれを通ると思ったが、繁春は「それなら丁度良かったな」と気になる笑いを含めた。それ以降は保健室まで一言も言葉を発しなかったが瑞代は悶々とした内心を持て余す。

しかし二階に下りるとそんな気分はスウッと消えていった。突然綺麗になった空気を大きく息を吸い、瑞代は自分も少なからず影響を受けていたのだと思い知る。三階にはまだ澱んだ空気が漂っていたのでここに来てようやく一心地ついたという感覚だった。

保健室の前で算は一旦立ち止まり「先客がいるぞ」と瑞代に告げる。

消毒液の匂いが立ちこめる室内に入ると、パイプ椅子に晃郎と陽太が座って喋っていた。客というより招かれざる不良だ。

「何してるの、二人とも」

「おう瑞代。ノートありがとな。席にいなかったからクラスの山岸に」

「あ、雨蓋さん。手！怪我したのかよ」

言葉を遮った陽太の額には大きなガーゼがくっ付いている。

「月丘くんこそ、頭大丈夫？」

「言い方に悪意を感じるぞ雨蓋。月丘の頭は大丈夫だからこっちに来い」

繁春は苦笑しながら瑞代に骨ばった手を差し出す。瑞代はそこに左手を乗せた。

繁春はじつと観察し感心したように呟く。

「随分綺麗に切れてるな。応急処置だけして病院に送ろう」

「近くだから一人でいいです。それで月丘くん、頭どうしたの？」

ヒヨコ色の髪は薄ら赤黒く濁っている部分がある。陽太は少し恥ずかしそうに目を逸らしてガーゼに手を遣った。

「窓側で雑談してたらいきなり窓が割れてさ。ちよっと破片が掠つてこうなったんだよ。……なんで隣にいたお前は無傷なんだよ」

「日頃の行いだろ。俺日々寺で徳積んでるし」

陽太が声のトーンを変えて真隣に愚痴ると晃郎は涼しげな顔で答える。瑞代はそんな晃郎にスツと目を細めて口を閉ざした。晃郎は気分を損ねたと思ったらしく慌てて「ウソウソ」と手を振るが、瑞代が不機嫌そうな顔になったのは違う理由だ。つけていた一つ目黼が影も形もなくなっている。突然窓が割れたというのは別の鎌鼬だろうから、それから晃郎を守ったのだろうか。

腑に落ちない部分は沢山あるが瑞代は繁春に促されたので立ち上がる。「付き添う？」と眉を寄せる晃郎に口の端を引き上げた。その心配を嗅ぎ取って瑞代は軽く返す。

「サボりの理由にしないで」

「バレたか。……そういやお前さ、午前中の騒ぎ知ってるだろ？」

「……見に行ったから知ってるよ。それがどうかしたの？」

「いや、どんなもんだったかと思って。何か変って陽太から聞いたからさ。……そっぴゃお前のノート取りに帰らなかったら見れたんだよな俺もぐっ」

晃郎は不自然に呻き身体を丸める。隣の陽太が良い笑顔なのでなにかしたのだろう。

「お大事に」と送りだされた瑞代は廊下に出て溜息を吐く。晃郎の危険に身をつっ込みたがる馬鹿さ加減はどうにかならないものか、

と頭を悩ませながら学校の近くにある整形外科に足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0263u/>

九十九奇譚

2011年11月24日17時54分発行